

【修士論文要旨】

戦国期今川氏の統治と政治思想

—「如律令」体制について—

森 弘 行*

本研究は『今川仮名目録』や法度、今川義元・氏真の印章から、今川氏における法治主義の特質性を考察したものである。今川氏の領国支配に関しては、検地や家臣団など様々な面から研究が進められてきた。これらの領国支配と『仮名目録』は深く関わっている。『仮名目録』は氏親が死去する二ヶ月前に作成され、その後今川義元が『仮名目録追加』を定めた。しかし、領国支配に関して、義元や氏真が発給した印判状に捺されている印章の種別から、その使い分けの考察はなされてこなかったため、それを課題にすることとした。

第一章では『仮名目録』と「如律令」の関連性について検討した。まず、先行研究から制定の目的は、公平な判決を下すことができる裁判規範を整えるためであったことを確認した。また、『仮名目録』による統治を念頭に置きつつも、若輩の氏輝が領国支配をするためのマニュアルとして作成したという意図もあったことを述べた。

次に氏親から義元期の朝廷・幕府との関係を「如律令」との関連性から考察した。氏親期の今川家と幕府は贈答がなされ、氏親は將軍足利義植を支援していたことから、両者の関係は希薄でないことを説いた。今川家と朝廷や公家との関係について、今川家が公家に和歌のことで師事をしたり、天皇から宸筆を下賜されたりと、両者は親密な交流があったことを確かめた。

氏輝・寿桂尼期において、今川家と幕府との関係を示す史料は見出されなかったが、今川家では公家たちと歌会が行われていたことや、近衛家とも氏輝期から交流が見られるようになったことを明らかにした。氏輝期には、氏親期よりも公家との付き合いが増えていたことから、今川家は幕府よりも朝廷重視の姿勢に切り替わりつつあったことを説いた。

義元期において、義元は氏親期と同様に幕府と贈答を交わし、友好的な関係を維持していたことを確かめた。今川家と天皇・朝廷の関係について、義元は氏輝期に見られない内裏修理料の献上をしたり、後奈良天皇の意を受けて大樹寺を保護したりするなど、朝廷との交流を重視していたことを説いた。

次に、義元が実際に天文十四年に「如律令」印で発給した理由を考察した。「如律令」印の使用は、古河公方を擁立していた北条氏に対して、今川氏はより高位の立場にある朝廷の威光を借り、古河公方を擁立した北条よりも上位の立場にあることを示すために用いたと説いた。朝廷の文化や知識が成熟していたと思われる駿河において、朝廷の律令制を背景とした執行命令としての「如

*国際人間学研究科歴史学・地理学専攻 博士前期課程

律令」と今川氏が目指した分国法による統治を目指すという政治思想とを結びつけて、「如律令」印を用いたと述べた。

「如律令」体制は『仮名目録』やその他の法度による今川領国において法による統治を目指す政治思想であり、それらに適合しにくい事態に対処する際、発給文書に「如律令」印を用いることで『仮名目録』を補完する体制であったことを論じた。

第二章では、「如律令」印と「義元」印の使用の差異から「如律令」体制の成立過程について検討した。義元発給の印判状を、禁制・法度類、諸役免除・安堵状・宛行状・特権付与、交通関連・目録・絵図に分類し、節ごとに考察をおこなった。その結果、禁制や法度など『仮名目録』や法度の内容を補完、改正した場合に、「如律令」印が使用されていたことを確かめた。また、基本的には諸役免除や安堵状などは人格的支配を重視する内容であるため、「義元」印・花押が使用されていたことを指摘した。なお、例外規定を執行する際にも、「如律令」印が使用されていたことを明らかにした。

義元の発給した印判状から、「如律令」印と「義元」印の使用を考察したが、義元期では安堵・諸役免除などに、人格的支配を重視するという意味合いが含まれており、その場合には個人印である「義元」印が使用されていたこと、それ以外に『仮名目録』や法度を補完する場合には「如律令」印が使用されていたことを明らかにした。また、安堵や特権付与に関する案件では「如律令」印と「義元」印の使用に明確な使い分けはなかったことを指摘し、このことより義元が目指した「如律令」体制は未成熟であったと評価した。

第三章では、氏真発給の印判状から「氏真」印と「如律令」印の使用の差異を手がかりにして、「如律令」体制の発展について、義元期と同じく印判状を分類し考察をおこなった。「如律令」印の使用は、義元期の使用法に加え、効力の継続を示す案件にも使用されていた。加えて、氏真は「如律令」印を安堵状や諸役免除などに使用したことから、義元期よりも用途を拡大させていたことを説いた。ただし、安堵や諸役免除を行う際、「如律令」印の使用が見られるが、「氏真」印も使用しているという点や、『仮名目録』に反する不入権を付与している事例が確かめられる。これらのことから、氏真の代でも「如律令」体制の完全な実現はできなかったと評した。

今川氏が目指した『仮名目録』による統治は、義元の代に「如律令」印を使用することから、法による統治を徹底させようという意志が表れたとみられる。それは義元の代では完成できず、氏真の代で個人的で人格的支配から法の規定による支配への発展がみられた。しかし、氏真も武田氏や徳川氏により攻められ、弱体化し、ついに滅亡したため、『仮名目録』に基づいた徹底した法治主義に基づく「如律令」体制の完成はしなかったと評した。

参考文献

大久保俊昭, 1988, 「『如律令』印について」『戦国史研究』十六号, 戦国史研究会

大石泰史, 1991, 「今川義元の印章とその機能 ―方形「義元」印と円形「如律令」印を中心に―」, 『戦

『国史研究』二一号，戦国史研究会

山室恭子，1991，『中世のなかに生まれた近世』，吉川弘文館

平野明夫，1992，「今川義元の家督相続」『戦国史研究』二四号，戦国史研究会

長谷川弘道，1992，「今川氏真の家督継承について」『戦国史研究』二三号，戦国史研究会

黒田基樹，1997，「戦国大名印判状の性格について」『戦国史研究』三四号，戦国史研究会

大石泰史，1997，「今川氏の滅亡と武田・徳川両氏の登場」『静岡県史 通史編2 中世』，静岡県 以後『静岡通2』と略す。

小和田哲男，2000，「今川義元の印判について」『今川氏の研究 小和田哲男著作集 第一巻』，清文堂

有光友學，2006，「今川氏の印章・印判状」『戦国期印章・印判状の研究』，岩田書院

有光友學，2009，「今川氏印章台帳」『戦国史料の世界』，岩田書院

佐藤進一 池内義資 百瀬今朝雄，1965，『中世法制史料集 第三巻』，岩波書店

石井進 石母田正 笠松宏至 勝俣鎮夫 佐藤進一，1972，『日本思想体系 21 中世政治社会思想 上』，岩波書店

勝俣鎮夫，1979，『戦国法成立史論』，東京大学出版会

有光友學，1994，「第四章 今川氏と不入権」『戦国大名今川氏の研究』，吉川弘文館

勝俣鎮夫，1997，「第一章 戦国の幕開きと今川氏親 第三篇 戦国時代の静岡 第四節 「今川かな目録」の制定」『静岡2』，静岡県

勝俣鎮夫，2018，「今川氏「敵内通法」について」『戦国史研究』三五号，戦国史研究会

清水克行，2018，『戦国大名と分国法』，岩波書店

黒田基樹，2019，「「今川仮名目録」の世界」『今川義元とその時代』，戎光祥出版

平井上総，2021，「戦国大名の分国法—大名領国のための法典—」『室町・戦国時代の法の世界』，吉川弘文館

小林清治，1994，「秀吉と禁制」『秀吉権力の形成—書札・禁制・城郭政策』，東京大学出版会

大久保俊昭，2008，「今川氏の「禁制」(一)」『戦国期今川氏の領域と支配』，岩田書院

丸島和洋，2019，「今川氏家臣団論」『今川義元とその時代』，戎光祥出版

大石泰史，2017，『今川氏年表 氏親・氏輝・義元・氏真』，高志書院

川岡勉，2023，『戦国期守護権力の研究』，思文閣出版

小和田哲男，1977，「太原崇孚雪斎研究」『信濃』第29巻第5号，信濃史学会

小和田哲男，2004，『今川義元—自分の力量を以て国の法度を申付く—』，ミネルヴァ書房

盛本昌広，1994，「戦国期の植生維持と権力」『日本歴史』4月号第551号，吉川弘文館

織田元泰・中村羊一郎，1981，「梅ヶ島村伝存の近世初期文書について」『地方史静岡』第十号，地方史静岡刊行会

長谷川幸一，2019，「宗教勢力への政策と統制」『今川義元とその時代』，戎光祥出版

有光友學，1994，「今川氏領国における伝馬制」『戦国大名今川氏の研究』，吉川弘文館

有光友學，2009，「駿河国長慶寺周辺寺領図写」『戦国史料の世界』，岩田書院

有光友學，1982，「今川義元—氏真の代替りについて」『戦国史研究』第四号，戦国史研究会

黒田基樹，2019，「「今川仮名目録」の世界」『今川義元とその時代』，戎光祥出版

大久保俊昭，「第一章 戦国の幕開きと今川氏親 第三篇 戦国時代の静岡 第二節 氏親の遠江平定と近隣の国々」『静岡2』

東京大学史料編纂所，1977，『史料綜覧 巻九』，東京大学出版会

鶴崎裕雄，「第五章 今川氏とその文化 第三篇 戦国時代の静岡 第二節 連歌師宗長」『静岡2』

鶴崎裕雄，「第五章 今川氏とその文化 第三篇 戦国時代の静岡 第一節 京下りの公家たちと今川

文化』『静岡2』

有光友學, 「第一章 戦国の幕開きと今川氏親 第三篇 戦国時代の静岡 第一節 駿遠豆の戦国時代と氏親の登場」『静岡2』

大久保俊昭, 1981, 「「河東一乱」をめぐる」『戦国史研究』第二号, 戦国史研究会

有光友學, 2008, 『人物叢書 今川義元』, 吉川弘文館

杉山博・下山治久, 1989, 『戦国遺文 後北条氏編第一巻』, 東京堂出版

久保田昌希・大石泰史, 2010, 『戦国遺文今川氏編第一巻』, 東京堂出版

下山治久, 2000, 『戦国遺文 後北条氏編補遺編』, 東京堂出版

静岡県, 1994, 『静岡県史 資料編7 中世三』, 静岡県